

From Kobe 1月 迎春 2013年1月 新しい変革の年に



鉄のふるさと 真出雲 出雲神楽「八岐大蛇」より



干支菓
望郷のハツ横

Stay Young Day !!

お互い笑顔で 前向き思考
元気で乗り切って生きましょう
本年もよろしくお祈りします

2013年1月
By Mutsu Nakanishi

《いつまでも若くいるコツ》 by ジョージ カーリン

1. 年齢、体重、身長など、どうでもいい数字は気にしないこと。こんな事は医者任せましょう。そのために医療費を払っているのですから。
2. 元気な友達とだけ付き合うこと。愚痴しか言わない人といると、こちらの気持ちも暗くなります。
3. 生涯学習あるのみ。コンピュータ、工芸、ガーデニング、ハム無線、なんでもよいので学ぶ姿勢を持ちましょう。脳を怠らせない事。怠けた心には、衰えという悪が宿ります。
4. 単純な事を楽しみましょう
5. 沢山、長く、大きな声で、お腹が痛くなるくらい笑いましょう
6. 悲しみ、耐えて、そしてまた進む。涙も出るでしょう。しかし一生涯付き合ってくれるのは、自分自身です。命ある限り、自分の人生を歩みましょう。
7. 好きなものに囲まれて暮らしましょう。家族、ペット、思い出の品、音楽、植物、趣味、何でもいからです好きなものに囲まれて暮らしましょう。家は自分の居心地の良い場所なのですから。
8. 体を大切に！今健康ならそれを維持し、悪いなら、改善に努めそれが無理なら、助けを求めましょう。
9. 後悔しないこと。ショッピング、隣町、外国、とにかく後悔する気持ちを忘れさせてくれる場所に出かけましょう。
10. どんな時でも、大切な人に「愛している」と伝えましょう

そして忘れてはいけない事。人生とは、自分が息を吸う数ではなく息を吐く瞬間で測定するものです。充実した毎日を生きましょう!!

支持基盤を失った民主党政権が倒れ、自民政権が復活し、数多くの期待を持って 新年を迎えました。

3年前に社会の変革の夢を託して選択した民主党政権。

現実には厳しく、不景気・雇用不安が増大する中、大震災・原発事故の未曾有の社会ダメージに何一つ決められぬ拙な政治にますます閉塞感。社会格差の拡大も著しく、「こんなはずではなかったのに」の思いが社会全体に蔓延。気がついてみると

「アジア随一の経済大国・貿易立国の自信もはるか遠くに消え去り、
中国・韓国ばかりでなく東南アジアの国々にも 置いてゆかれる」と。

この未来への希望よりも現実の不安感と閉塞感が社会を覆う中、
一気にまた、「変革と前進」への期待が自民政権を復活させた。

でも「昔は良かった」では困るのである。この社会全体を覆う閉塞・不安感を一掃する明るい社会の実現を望む。このためには、自民政権が以前進めてきた「東京一極集中」「国際競争 グローバル化・効率化に名を借りたあまりにも過酷な弱肉強食 競争社会の出現」の政策をそのまま 進めてもらっては困るのである。

「企業・金融一辺倒の国際貿易立国からの脱皮 東京一極から出し、地方多極拠点・産業の育成」
「格差拡大を食い止め、若い中間層の拡大」等々 この厳しい閉塞感の中で出てきた数々の提言に耳を傾け、
社会全体が納得する新しい変革のアプローチの中で「日本再生・日本復活」を成し遂げてもらいたいとの思いが強い。

かつての団塊の世代としてすごした青年時代「することなすことなにもかもが 手本もなく新しいことで、夢中で立ち向かった躍動」の時代 そんな思いを 今の若者にも託したい。



朝日新聞 2012年12月21日金曜日「教育」欄 記事より

原発の破壊事故に未曾有の東日本大震災になすすべもなく破壊された巨大建造物 そして、高度成長期を支えた社会インフラ道路・橋・トンネルなどの構造物が寿命を迎えつつあり、数々の維持保守不良の問題を起こして社会問題化している。これらの建造・技術に多少ともかかわってきた「団塊の世代のエンジニア・技術屋」にとっては

それこそ「自分の生き様」。
でも今「多少とも 後ろめたさ」を感じつつ、「今後 技術屋はどうすればよいのか」の迷いがある。
一方、これらの迷いを反映するかのように「大学の理系 特に『工学部』を志望する若者が減っている」と聞く。

昨年12月21日の朝日新聞「教育」欄に21世紀にふさわしいエンジニア像とその教育について掲載されていました。

「21世紀のエンジニア教育には『工学と社会とのかかわりと理解』が不可欠。大学の工学教育は、産学官協同を唱えるばかりでなく、社会とダイレクトにかかわって 実践していくエンジニアの育成へと変革してゆかねばならぬ」とこの記事を読みました。

米オーリン工大の取組「社会をデザインする工学 オーリンの三角形」。ここにも社会への「心くばり」が21世紀のエンジニアに必須と記されていました。

団塊世代の私には なかった21世紀のエンジニア像。 ご参考になれば。

老化が日に日に迫り来る世代 でも そこに仲間がいる
お互い笑顔で前向き思考 元気で乗り切って生きましよう
本年もよろしくお祈いします



教育

社会をデザインする工学

創設10年 米オースリン工科大

10年前にできたばかりの小さな大学が注目を浴びている。米マサチューセッツ州のオースリン工科大は、知る人ぞ知る大学だ。21世紀にふさわしいエンジニアの育成をめざす独自の教育は、「この数十年で最も野心的な工学教育の実験」とも称され、世界中から視察者が相次いでいる。

「よりよい社会を築くため、人の社会のニーズを知り、その解決策を構築し、創造的なビジネスにつなげられる革新的な人材を育成する」。オースリン工科大が掲げる使命だ。単にすぐれた技術者ではなく、技術を講じて社会を変えていくような人材を育てようというのだ。

技術だけでは

必要とされるのは三つの要素。「技術」、人や社会を深く理解してニーズを知るための「芸術」、人文社会科学。そして、解決策を社会で実現するために必要な「ビジネスや起業家精神」。それを表出したのが「オースリンの三角形」だ。



オースリン工科大の前身は、高等教育への変遷をしてきたオースリン財団だ。科学の応用が中心で、産業から遠い従来の工学教育への不満から、財団は新大を創



「学ぶ情熱かきたてる」
リチャード・ミラー 学長に聞く

オースリン工科大の教育の大きな特徴は、学生に自ら学びたいと思わせる動機付けだ。そのヒントは、彼の「バイオリソロジー」で出た。日本の才能教育「鈴木メソッド」の「親の子はもはまなすも親めはないが、親を動かさず、バ

芸術・ビジネスと3本柱 ■まず手を動かす



STEM教育の授業風景。教員は、学生5人に対して1人の割合で「米マサチューセッツ州のオースリン工科大」

設を志向した。「大学の文化は簡単には変わらない。ゼロからつくるとか、というところになった」とリチャード・ミラー学長は振り返る。1997年にアイオワ工科大学長から移り、数人で大学の構想を練った。02年の開校以来、学長を務める。財団は1億5千万ドルをそっくり新しい大学に寄付して解散した。

チーム力養う

チームで行うプロジェクトへの参加も必須だ。分野の人と協力する力を養うため、1年生のうちから新しい物を作ったり、町の人がインタビューして問題を解決したり、さまざまなプロジェクトに参加する。教員もチームで指導する。その仕上げが、4年生が教員でチームを組み、「1社」がかりでとりくむ「スタートアップ」と呼ばれるプロジェクトだ。スポンサーとなった企業が提案した課題に取り組み、すべて自分たちで計画を立ててものを完成させる。教員も参加するが、上役はあくまでも学生だ。過去のテーマを例にと

ば、自分からとんとん学生にいくはずだ。難を担るのは教員だ。これからのエンジニアは、うって自ら学んでいくことが大切だ。だから、いかに学生を育ててこそ重要だ。人間の社会への深い理解も、かかせない。19世紀はすでにオースリン・タイプのエンジニアがもつともっと求められるようになる」と話す。

「自分からとんとん学生にいくはずだ。難を担るのは教員だ。これからのエンジニアは、うって自ら学んでいくことが大切だ。だから、いかに学生を育ててこそ重要だ。人間の社会への深い理解も、かかせない。19世紀はすでにオースリン・タイプのエンジニアがもつともっと求められるようになる」と話す。

「個々に見れば、日本の大学ですでに取り組んでいるものもある。だが、デザイン志向や多層型の授業が、ここまで全科目で徹底されているところはないだろう」と小林信一・筑波大教授はいう。

世界的に工学教育の標準が厳しく、千代田はデザイン志向、そしてチームワークだ。フィンランドでは、ヘルシンキ工科大学、ヘルシンキ工科大学、ヘルシンキ芸術デザイン大学の3校が合併して一昨年、アールト大学ができた。まさにオースリンの三角形と同じ3要素の融合だ。トウリン・テリウ学長は「デザイン重視の工学教育を通してユニークな価値の創造をめざしたい」と話す。

◆◆◆記事や「子どもたちは」へのご感想、教育に関するご投稿を募集します。edu@asahi.comまたはFAX03・3542・4855へ。